大学院修士課程体験記⑱

大　西　健　太（おおにし　けんた）腫瘍病理学教室　修士課程（令和5年度入学）

私は医学院修士課程（医科学専攻）に在籍し、腫瘍病理学教室にて田中伸哉先生、津田真寿美先生のご指導のもと研究を行っております。この度、体験記を執筆させていただく機会をいただきましたので医学院の修士課程に入学するに至った経緯から卒業後の目標まで記させていただきます。

[修士課程に入学する以前・入学経緯]

私は学士課程では北海道大学医学部保健学科検査技術科学専攻に在籍していました。そんな私が医学院の腫瘍病理学教室にお世話になるきっかけとなったのは学部4年次の卒業研究でした。癌研究に取り組みたいという思いと腫瘍病理学教室でHARP現象（ハイドロゲル上で癌細胞を培養することで急速に癌幹細胞へ先祖返りする現象）という革新的な発見がされたという情報を新聞で目にしたことから腫瘍病理学教室にとても魅力を感じました。また、配属先として希望する事を見据えて3年次の冬に予め面談をさせていただいた際に「修士課程までご指導いただき、研究の経験を得た上で将来は医薬品メーカーに研究職として就職を目指したい」という率直な思いを伝えたところ、快く聞き入れていただいたことで保健学科に所属する身でありながら医学院の腫瘍病理学教室で研究に取り組みたいという気持ちが確実なものとなりました。その後は無事に腫瘍病理学教室への配属希望が通り、私が腫瘍病理学教室を志望した理由でもあったHARP現象を用いた癌幹細胞周囲の微小環境の解明について研究をさせていただきました。研究開始直後は医師ではない学生が私しかいないという環境に戸惑うこともありましたが、直接ご指導くださっている津田真寿美先生を始め教員の先生方や博士過程の先生方、さらには技術員や秘書の方々がとても優しく親身に接してくださりすぐに馴染むことができました。もちろん実験がうまくいかないことも多く試行錯誤の連続でしたが、様々な方に支えていただき卒業時には卒業研究優秀賞をいただくことができました。

[入学後を振り返って]

修士課程に入学後は、先述の卒業研究が終了してから半年近く空いていたものの教室の皆さんにお帰りなさいと暖かく迎えていただき戸惑うことなく大学院生としての生活を始めることができました。しかし、いざ研究が始まると学部生の頃よりも主体的な研究や定期的なミーティングでは実験結果を簡潔で論理的に説明することが求められ、その点でとても苦労しました。特に研究については卒業研究をより深掘りした内容に取り組んでいますが、実験を進める中で計画の根本から改善しなければいけないことが発覚し予想外の展開になったことで焦りを感じることもありました。さらに私は大学院での研究活動や講義を最優先にしつつも入学直後から就職活動にも取り組んでおり、研究の合間を縫ってインターンシップや面接に参加する多忙な日々が続きました。しかし、腫瘍病理学教室のありとあらゆる方々の研究に対するご指導やサポートのおかげで先述の研究における問題点を改善することができ、就職活動についても研究や講義が最優先であることは共通認識でありつつも応援し、時には心配してくださる先生方や教室の雰囲気に支えられ志望の製薬企業から研究職として内定をいただくことができました。この様に、今振り返ると非常に課題が多い1年間でしたが研究室の皆様のご支援のおかげでなんとか乗り越えることができたことを改めて感じています。

[これからの目標について]

まずは、残り1年の修士課程で優れた研究結果を残すことができるよう余すことなく全力で研究に取り組み、その中で研究の経験や実験技術を培っていきます。さらに、卒業後は修士課程を通して身につけた力を発揮して企業の研究者として最大限社会の医療や健康に貢献することを目標としています。

[入学を希望する皆さんへ]

将来大学に残って研究者になるのか、企業の研究者になるのか、研究とは全く異なる道を目指すのかは人それぞれだと思いますが、これらの目標を達成する上で修士課程はとても多忙な2年間になると思います。医学院は充実した研究活動と共にそれらの目標を達成するために努力することができる、とても理想的な環境であると身を持って感じています。皆さんも、修士課程で医学研究を行った上で達成したい目標があるのでしたら、是非医学院に入学して目標に向かって努力してみてください。

令和５年度腫瘍病理学教室のBBQの集合写真